



慈恵大学2号館F棟

『港区の歴史的建造物』が刊行されます

東京の都心に位置する港区には、優れた歴史的建造物が数多く所在しています。それらは、魅力あるまちの景観をつくり出すとともに、歴史や文化を物語る文化遺産でもあります。また、建てられた当時の技術や社会の様子をよく伝える建物には、文化財として大切に守られているものもあります。

本館では、平成15年度から歴史的建造物所在調査を実施してきました。この調査は、現存する貴重な歴史的建造物を記録として留めるとともに、今後の保存や活用に向けた基礎資料を作成するものです。主に50年前までに建てられた建築物を対象としたこの調査によって、およそ900棟の歴史的建造物がリストアップされました。現代の新しい都市のなかにも、多くの歴史ある建物が息づいている様子を窺うことができます。調査結果に基づいて、本年3月末には調

査報告書『港区の歴史的建造物』を刊行する予定です。

調査報告書では、区内の歴史的建造物の分布状況と、代表的建物の解説や写真を収録しています。

港区に現存する歴史的建造物には、多彩な様式が見出せるのが大きな特徴です。江戸時代に建てられたお寺や神社の建物、近代洋風建築や和風建築、また庶民的な町家やモダンなビルディング、鉄道や港湾施設といった土木遺産など、江戸時代から明治、大正、昭和にいたるまでの幅広い種類の建物があります。これらの多彩な歴史的建造物からなる港区の特徴が浮かび上がるように、できるかぎり多くの種類の建物を報告書では収録しています。

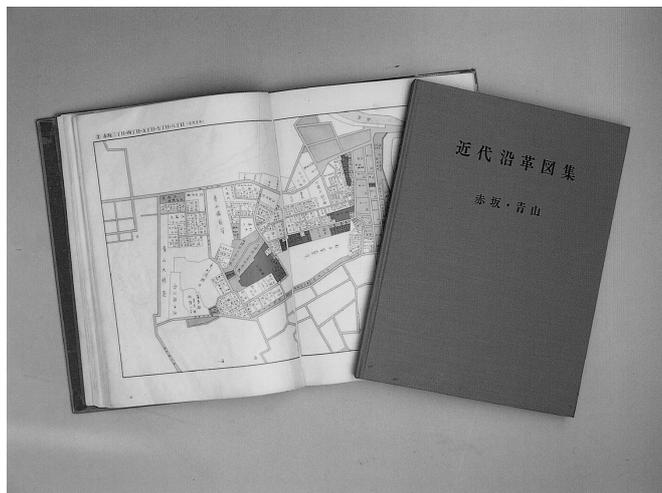
『港区の歴史的建造物』は、本年4月以降に本館で頒布する予定です。

増補 港区近代沿革図集 赤坂・青山

今の〇〇町〇丁目〇番〇号が、昔は△△町△丁目△番地だったのか？逆に昔の□□町□丁目が今のどこにあたるのか？—このような町名の移り変わりは、地域の歴史を調べる時、基本的なことではありますが、たいへん重要です。

『港区近代沿革図集』は、このような作業の手助けとなるべく、今から 36 年前の昭和 45 年（1970）、当時の三田図書館資料室によって作成されました。本書は港区内を 5 つの区画に分け、各時代の地図とともに地名・町名解説を一つにまとめたもので、第一集「赤坂・青山」（昭和 45 年）を皮切りに、第二集「芝・三田・芝浦」（昭和 46 年）、第三集「高輪・白金・港南」（昭和 47 年）、第四集「新橋・芝公園・芝大門・浜松町・海岸」（昭和 51 年）、第五集「麻布・六本木」（昭和 52 年）を続けて発行しました。

『港区近代沿革図集』誕生のきっかけは、「住居表示制度」の実施でした。住居表示に基づいて成立した新たな町名の普及とともに、旧来の愛惜すべき町名を記録し、地域の今昔を比較対照できる図書を目的としています。その手段として、江戸幕府普請奉行が幕末期に編集した延宝（1673～1681）から文久（1861～1864）にいたる約 200 年間の変遷絵図である『御府内往還其外沿革図書』『御府内場末往還其外沿革図書』の意図の継承を志しました。本書前半部には嘉永 3 年（1850）・文久 2 年（1862）の絵図を基本に、明治から大正、昭和にいたる同地域の地図を時代順に編集した沿革図を掲載し、後半部には新旧の公式町名、地名のみならず、通称・小路・坂・橋・谷・原・岡・川など土地に関する固有名詞をできるかぎり集めた解説を収録しています。本書はその充実した内容から、昭和 52 年、行政が作成する図書としては異例の長谷川伸賞を受賞しました。



『港区近代沿革図集』は発行当時からたいへん好評を得て、第一集から第三集は早い時期から絶版となっており、利用者の方々より再版の声が多く寄せられていました。そこで今年度から、前回の発行地域順に従って、年に 1 冊ずつ増補版を発行することとなりました。

前回の第一集「赤坂・青山」編では昭和 41 年の地図が最終となっていますが、今回は近年の平成 17 年（2005）、昭和 61 年、戦前戦後の様子がわかる昭和 22 年、昭和 12 年の地図を加え、地名解説にも新たな項目を追加、誤りを修正するなど、資料としてのさらなる充実を図っています。

『増補 港区近代沿革図集 赤坂・青山』は 4 月以降、港郷土資料館、港区役所 3 階区政資料室等で発売を予定しています（頒布価格 ¥1,600）。港郷土資料館では、地図などの所蔵資料を基にした出版物の発行を通して、区民への情報提供の充実を進めています。これを機会に区民をはじめ多くの方々に本書を手にしていただき、郷土意識の育成や郷土史に親しむ一助となることを願ってやみません。

（文化財保護調査員 平田秀勝）

最近の遺跡発掘調査から

～江戸の屋敷と弥生のむらと～

港区内の遺跡発掘調査は、汐留地区遺跡の現地発掘調査が平成12年度に完了し、六本木六丁目地区第一種市街地再開発地域内遺跡（長門長府藩毛利家屋敷跡遺跡、乗泉寺跡・大法寺跡遺跡、円福寺跡遺跡）、長門萩藩毛利家屋敷跡遺跡、伊予宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡、上野沼田藩土岐家屋敷跡遺跡といった、5,000㎡を超える大型発掘調査の現地作業が次々と収束を迎え、このところ200㎡から1,500㎡前後の中小規模の発掘調査がいくつか続けられています。

これらのうち、過去3年の間に行われた、あるいは現在も進行している次の4件の発掘調査の概況について、平成18年（2006）3月4日の「第9回 港区文化財調査・研究発表会」で発表しました。

豊後岡藩中川家屋敷跡遺跡（旧大和柳生藩柳生家屋敷跡）は、増上寺の北に接する沖積低地に形成された遺跡です。上水遺構や屋敷境界の石積みなどが検出されましたが、江戸時代の屋敷造成以前の地形を考える上で興味深い情報が得られたことに、少し注目しましょう。

この遺跡は、旧桜川小学校の敷地でした。学校名に示されているように、敷地南方には江戸時代、俗に桜川と呼ばれた大下水が構築されていました。桜川は、近代以降も引き続き下水溝として使われ、大正から昭和初期に暗渠となったことが『近代沿革図集』などから分ります。ところで、この種の大下水の構築は、どうも旧地形に関係していると思われる節があります。豊後岡藩中川家屋敷跡遺跡の発掘調査では、調査範囲の北端近く自然堆積層が落ち込んでいることが確認されました。この落ち込みが片側だけであるのか、対岸が存在するのか、さらに旧桜川側の状況は分かりませんが、遺跡周辺は大きな水路を構えなければならない地形上の特徴

があったと考えられるのです。

区内三田四丁目にある区立亀塚公園内では、わずか60㎡程でしたが、港区の古代史を考える上で興味深い遺物が得られています。ここは江戸時代、上野沼田藩土岐家の下屋敷でした。平成14年度に実施した確認調査で、近世・近代の遺構・遺物とともに、弥生時代の土器が出土し、同時代の住居跡などの検出に期待が持たれました。平成17年（2005）11月に行った発掘調査で、弥生時代と考えられる遺構の一部が検出されました。残念ながら、遺構の大半が江戸時代あるいは明治時代と考えられる遺構によって壊されていましたが、おそらく竪穴住居跡ではないかと考えられます。土器も出土しており、古くから伝えられてきたように、区立亀塚公園内には弥生時代の集落が営まれていたことがほぼ確実となってきました。

港区内の遺跡発掘調査は現在もなお、近世の都である「江戸」とその近郊を対象とした調査が多くを占めていますが、ここ数年、弥生時代から古墳時代に関する良好な情報が着実に増えつつあり、今後の調査の進展にいつそうの期待が持てるといえます。



豊後岡藩中川家屋敷跡遺跡の様子

（学芸員 高山 優）

ざ　こ　ば 雑　魚　場

—江戸庶民の魚市場—

皆さんは「芝浜」という落語をご存知でしょうか？〈魚屋の勝五郎は怠け者で、その朝も奥さんに叩き起こされ、嫌々河岸に向かった。ところが、まだ早すぎて誰もいない。しかたなく、芝の浜へ出ると大金の入った皮財布が流れ着く。大喜びの勝五郎は、その金を使い友達に大盤振る舞いをしたあげく、再び寝入ってしまうが…。〉勝五郎は、この後どうなったのか？話の続きは、落語を聞いてからのお楽しみということにしましょう。

実は、この落語「芝浜」の舞台となったのが、東海道沿いの芝の浜で営まれた「雑魚場」（現：港区芝四丁目）という魚市場なのです。雑魚場では芝浦や金杉浦で獲れた魚を商っていました。芝浦や金杉浦は、徳川家康が江戸に入府する以前からの漁村であり、家康入府後は、将軍家に魚を献上する「御菜ヶ浦^{おさいがうら}」として重要な役目を担います。クロダイやカレイ、コチ、コノシロ、そして芝の名前がついたシバエビなどの江戸前の魚を獲っていたことが記録に残されています。雑魚場では、将軍家へ納めた魚の残りを扱っていたと言われており、江戸幕府の御用市場とされた日本橋の魚市場とは違う、庶民的な市場であったようです。落語「芝浜」の勝五郎のような棒手振りの魚屋が仕入れて、江戸の人々に売り歩いたのでしょう。

ところで、この雑魚場では魚だけでなく、貝の商いも盛んだったことが、最近行われた雑魚場跡の発掘調査によってわかってきました。大量の貝殻が堆積していたのです。貝層は最も厚いところでは3mにも達し、その範囲は、少なくとも南北200mに及ぶことがわかりました。

雑魚場跡から出土した貝には、マガキ、アカガイ、アサリ、サルボウガイなどがありましたが、膨大な量の出土が見られたのはバカガイと

いう貝でした。バカガイは別名「アオヤギ」とも言います。お寿司屋さんなどではアオヤギと呼ばれていますので、皆さんにはこの名前の方がお馴染みかもしれません。



堆積したバカガイの様子

江戸の武家屋敷跡や町屋跡の発掘調査では、その場所に住んでいた人々の食べかすである、ハマグリやアサリ、ヤマトシジミ、マガキ、アカガイ、アワビ、サザエなどの貝殻が出土しますが、バカガイの殻は、これまでほとんど見つかっていません。武家屋敷跡や町屋跡の発掘調査の成果だけでは、江戸の人々はバカガイを食べていないように見えてしまうのです。しかし、今回の雑魚場跡の調査で、大量のバカガイが出土したことから、バカガイは剥き身にされて江戸の市中に出まわっていたことがわかりました。雑魚場は、バカガイを剥き身にする加工場でもあったのです。

江戸時代初期に、江戸では「佃煮^{つくだに}」が作られるようになります。雑魚場で剥き身にされたバカガイも、佃煮に加工され江戸の人々の食膳に上っていたのではないのでしょうか。

出土した貝殻の種類や量、貝殻が堆積した時期などの詳細な調査はこれからですが、江戸の人々の暮らしぶりの一側面が新たに解明されるようです。（文化財保護調査員 山根洋子）

東禅寺事件の「賞牌」^{しょうはい} ～その2～

文久元年（1861）5月28日、高輪東禅寺のイギリス公使館を水戸藩の浪士が襲撃します。幕府・大名の警備陣は奮闘してこれを撃退、これを称えてイギリスより贈られた記念のメダル（「賞牌」）が近年発見されています（大阪府・造幣局所蔵）。『資料館だより』55号では、関係者にメダル授与の連絡がきたのは、事件後30年近くたった明治22年（1889）だったことを、警備の武士の証言によってあきらかにしました。その後、幕府の外交文書（『^{ぞくつうしんぜんらん}統通信全覧』）を中心に調査を進めた結果、新たな事実を見出しましたので、その概要を報告します。

事件後の7月26日、老中安藤信正・久世^{くぜ}広周は、イギリス公使オールコックに、戦闘において格別の功績^{てやく}があった者の名前を通知しています。外国御用出役（幕府直属の警備隊）からは天野岩次郎・江幡吉平・今井善十郎・柘植^{てやく}鋳吉・澤井^{たく}楨之助・安藤^{あんどう}鋭次郎・河野寅吉・北條^{きたじょう}薫三郎・中尾^{なこう}祐太郎・大貫^{おおい}増吉・深津^{ふかづ}弥太郎の11名。幕府とともに警備を担当していた大和郡山藩の藩士からは石川治助・川邊^{かわべ}助十郎・上原^{かみはら}瀧之助・谷澤^{やざわ}鉦之助・山村^{やまむら}富治・八十島^{やそしま}惣助・中村^{なかむら}伊三郎・山口^{やまぐち}民之助・野村^{のむら}寅蔵・横地^{よこぢ}豊三郎の10名、合計21名が挙げられています（名前は「働きの甲乙」の順です）。彼らは直接襲撃者と斬り合った者たちと考えられます。

さらに1ヶ月後の8月28日、安藤・久世は再びオールコックにあてて、東禅寺事件で活躍し、将軍より褒美をあたえた者81名の名前を書き送っています。内訳は幕府の外国方・外国御用出役その他57名。大名の松平^{のりやす}乗全（三河西尾藩主・東禅寺の警備を担当）と松平^{やすのぶ}保申（大和郡山藩主）。松平乗全の家来4名と松平保申の家来18名となります。前記の21名も含まれていますが、負傷者の手当をした東禅寺地内の僧の名

なども見え、実際に戦闘に参加していなくても事件に貢献した者を広く含んだリストと言えるでしょう。このリストをオールコックは本国イギリスの外務大臣にあてて送付します。

文久3年9月2日、休暇帰国中のオールコックにかわり代理公使をつとめていたニールは老中に、「わたしはこのたびの便で、金の「メダイルレ」1個、銀の「メダイルレ」82個を受け取りました。これは、公使館の警備を引き受けた大名（の家臣）と、そのとき抜群の勲功をたてた役人に贈られるものです」との書簡を送りました。メダルは事件の2年後に日本に到着していたのです。さらに、銀のメダルの数は幕府が8月28日付で通知した^{ほうしゅうしや}褒賞者の数とほぼ一致することから、メダルの授与対象者をおおよそ特定することができました。また、造幣局所蔵のメダルは銀製ですが、ほかに金のメダルが送られていることもあきらかになりました。金メダルの贈り先は不明ですが、将軍あるいは大和郡山藩主と推測できます。

外国奉行はメダルの受納について「外国人のため死力をつくした護衛の者たちに、イギリス政府が格別の真心をもって贈ってきたものであるから受納してもよいだろう」との見解を老中に示します。この上申を受けて老中は11月6日付の書簡でニールにメダルを受け取ることを告げ、日時については近日中に幕府の役人と公使館の書記官とで委細決定する、としました。しかし、交渉はなかなかおこなわれなかったもようで、メダルを受納したという記録が見出されないまま、幕府の史料は沈黙します。そしてメダルは受け取るべき人の手元に届かないまま、30年近くどこかに眠ることになったのです。

（文化財保護調査員 吉崎雅規）

失われゆく江戸文化、受け継がれゆく江戸文化

— その4 浮世絵版画① —

浮世絵は海外でも人気のある美術ジャンルの一つです。北斎や広重の風景、歌麿の美人、写楽の役者絵など、有名な作品もたくさんあります。複製品や絵葉書に作品そのものが再現されるというだけでなく、浮世絵を題材にしたデザインが、ノートやファイル類などの文房具に使われたり、雑誌の表紙やポスターに利用されるなど、今でも日常の身近な場面で浮世絵を目にする機会は少なくないでしょう。

ひとことに「浮世絵」といいますが、美術の分類では、浮世絵師の自筆による肉筆浮世絵と、絵師が下絵を描いたものを木版画にした浮世絵版画に分けられます。浮世絵版画の中でも、明和初期（1765年頃）以降の、数色から十数色におよぶ多色摺りのものを錦絵といいます。「見返り美人」など、肉筆作品でも有名で目にする機会が多いものはありますが、一般的に「浮世絵」と言った場合、この「錦絵」の範疇に入る作品を思い浮かべる場合が多いのではないのでしょうか。



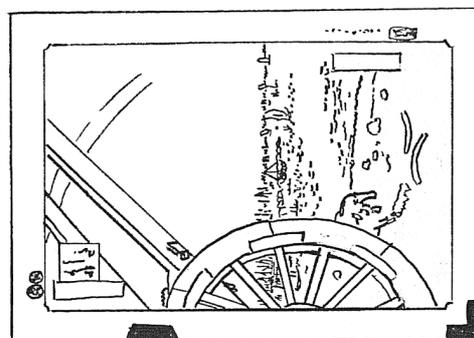
歌川広重画「江戸名所百景 高輪うしまち」

安政4年(1857) 本館蔵

明和期の初め、絵暦（大小暦）交換会が大流行し、作品の意匠と美しさが競われました。この時活躍した浮世絵師・鈴木春信と周辺の人々によって技術が飛躍的に進歩したことをきっかけとして、錦絵が誕生した、というのが定説です。様々な色や摺り方によって彩られ、まるで「錦」のように美しいため「錦絵」と呼ばれるようになったとされます。

木版画に色をつける技術は、江戸時代初期の寛永年間（1624～44）頃にはすでに行われていましたが、浮世絵版画で一般的になったのは、寛保年間（1741～44）頃でした。錦絵誕生の前段階にある「紅摺絵」では、紅色に草色、黄色を加えた3色までのものが多く、色数が増えても藍・茶を加えた5色程度までです。明和期以降の「錦絵」では、色数も飛躍的に増えていき、摺り方にもさまざまな創意工夫が加えられるようになりました。

高度な技法の多色摺りが発展するためには、版画を木に彫った「版木」に摺り重ねの目印となる「見当」の発明が不可欠だったと考えられます。この「見当」というのは、横長に置いた版木の右下（カギ見当：カギ形）と中央（引き付け見当：台形）の2箇所に彫りつけるものです〔下図参照〕。



引き付け見当

カギ見当

*左の絵を版木にした場合の図（左右反転します）

この見当を目印に紙を合わせることで、何枚もの板を使って様々な色を重ね摺りしても、版がずれずに、まるで手で一枚ずつ描いたように美しく仕上げるのが可能になります。

浮世絵版画では、絵師・彫師・摺師の分業によって一つの作品を制作します。一枚の板に絵の具をのせて一度に色をつけるのではなく、何枚もの版木を使い、作品によっては15～20回もの摺りを重ねて完成に至ります。

まず、絵師が版下の前段階の粗描、〈下絵〉を描き、この下絵をもとに最終稿である〈版下〉が描かれます。版下は〈版木〉に貼られ、彫師によって、〈主版〉（墨板・地墨板ともいう）が彫られ、最後に、前述の〈見当〉が彫りつけられます。主版（墨板）は、墨（黒）一色の線画です。さらにこの墨板を使って、色をつけるための色板の数だけ〈校合摺〉が彫師によって

摺られ、絵師によって色の指定〈色さし〉がされます。校合摺は色版の版下となり、それぞれの色版が彫られます。修正（板調べ）の後、見本摺、さらに修正を加えた後、本摺がなされて完成となります。

言うまでもなく、絵師・彫師・摺師の技術の成熟度がそのまま作品に反映します。絵師の描画力やセンスはもとより、彫師が髪の毛の一筋一筋、米粒ほどの小さい人影や繊細な着物の柄などを見事に彫り上げ、摺師は微妙な色使いや、遠目には分からないニュアンスを和紙の上に表すなど、細部にわたる高度な技術が作品の出来映えを決めるのです。

参考文献：日本浮世絵協会編「原色浮世絵大百科事典 第三巻」（昭和57年 大修館）・東京伝統木版画工芸協会編「浮世絵『名所江戸百景』復刻物語」（平成15年）

（文化財保護調査員 小澤絵理子）

ホームページがリニューアルされます

「港郷土資料館のホームページはないの？」お客様から時折質問を受けます。現在のページは「みなと教育ネット」の「教育関連施設」から入って「郷土資料館」にたどり着く、という少し見つけにくいものですが、平成18年度から郷土資料館が区立図書館とともに教育ネットから独立し、新しいページが公開されることになりました。

資料館の概要や展示・講座などのお知らせをはじめ、必要な情報をいつでも素早くお伝えできるよう、また資料館をより気軽にご利用いただけるよう、試行錯誤しながら準備を進めているところです。例えば、画面を楽しくするだけでなく、お知らせ等の文字読み上げや、こども（小学生）版・英語版といったバリアフリー、モバイル対応も試みています。この『資料館だ

より』も、ホームページからも読めるようになります。

また、資料館と図書館をつなぐ「ゆかりの人物データベース」で、港区にかかわる多彩な人物を、ゆかりの場所や関連所蔵資料・図書と共にご紹介します。インターネットでの情報を一つの手がかりにして、家に居ながら、まちを歩きながら、そして実際に資料や図書にふれながら、港区の歴史を身近に感じていただければと思います。

（文化財保護調査員 大坪潤子）

（現 URL）

<http://svha0012/minato/kyoiku/shisetsu/kyodo/index.html>

（新 URL）

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>